

まのだい ふるやしき 間野台・古屋敷遺跡C地区(第9次)

—古代から脈わたった臼井—

調査課長補佐 寺 里 和 久

遺跡の立地と周辺遺跡

間野台・古屋敷遺跡が立地する台地は、下総台地のほぼ中央、印旛沼の南岸に所在し、鹿島川と手繰川によって開析された標高約32mの台地上に位置する。

本遺跡が所在する佐倉市間野台地区は、京成臼井駅にも程近いことから近年宅地化が進み、周辺では造成工事に伴う発掘調査が繰り返し実施されている。昭和50年には佐倉市立臼井中学校の建設に伴って谷を挟んだ二つの遺跡を、それぞれ間野台遺跡(A地区)、古屋敷遺跡(B地区)として発掘調査を実施し、弥生時代の住居跡及び古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡が検出され、集落の存在が確認された。また13世紀後半から15世紀にかけての地下式坑や土坑墓群が検出され、さらに古屋敷遺跡で検出された土坑墓群からは多数の武蔵型板碑が出土している。

平成20年には、当センターにより臼井中学校グラウンドの南隣接地を間野台・古屋敷遺跡C地区として発掘調査を行っている。昭和50年の調査と同様に古墳時代後期及び奈良・平安時代の住居跡と、さらに大規模な粘土採掘坑が検出され、それぞれの集落がさらに広がることが確認できた。また、中世台地整形区画及びそれに伴う建物跡や井戸、水溜に使用されたとされる粘土貼土坑、貯蔵用の倉庫と考えられる地下式坑など多数の遺構が検出されている。これら中世の遺構は、地名の由来と考えられる屋敷跡の存在をうかがわせるものである。

本遺跡から北へ約2.5km、印旛沼南岸の台地上(現、聖隷佐倉市民病院周辺)には縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡である江原台遺跡^{えぼらだい}が所在する。古墳時代後期～奈良・平安時代の堅穴住居跡が

約200軒、掘立柱建物跡が約80棟検出され、多くの墨書土器が出土している。中世では本遺跡の南側に臼井屋敷^{うすいやしき}遺跡が位置し、また、印旛沼に面した台地上には、大規模な惣構^{そうかまえ}構造を形成し、戦国時代前半期は臼井氏、後半期は原氏の居城として慶長9年(1604)の廃城まで栄えた臼井城^{うすいじょう}跡が所在し、当地域における重要な拠点として機能していた。

遺跡の概要

今回発掘調査を実施した地点は、臼井中学校校舎の西側に隣接する北側調査区と、同校グラウンド南西側に位置する南側調査区の2地点からなっている。

北側調査区は、台地の縁辺に沿った南北に細長い形状をしており、縄文時代土坑8基、古墳時代後期住居跡10軒、奈良・平安時代住居跡7軒、有天井土坑1基、掘立柱建物跡1棟、中世道路跡2条、溝状遺構4条が検出されている。

南側調査区では、古墳時代後期住居跡7軒、奈良・平安時代住居跡5軒、中世台地整形区画1ヶ所、建物跡1棟、溝状遺構3条、地下式坑8基、方形堅穴状遺構7基、火葬墓1基が検出されている。

古墳時代後期の様相

古墳時代後期住居跡では、床面直上より炭化材及び焼土が多量に出土し、床面に一部被熱の痕跡も見られる焼失住居が多く検出されている。南側調査区の21号住居跡のカマドからは、土師器坏が逆さに伏せられ重なった状態でカマド脇の床面直上から出土し、また25号住居跡では、土師器高坏が逆さに伏せられた状態で出土している。これらの遺物出土状況から、住居廃絶時に祭祀的な行為が行われたと考えられる。

出土した遺物の中で特徴的なものとしては、5号住居跡から出土した子持勾玉が挙げられる。佐倉市内ではこれまで出土例はなく、さらに印旛郡市内でも印西市油作遺跡第2地点で出土したものや、同市船尾で出土したもの、下総町(現、成田市)で表採されたものなど限られている。また、8号住居跡からは土鈴^{どれい}が出土し、上部のつまみ部分は欠損しているものの、本体はほぼ完形である。これらの遺物は祭祀等に使用されたものと思われる。

奈良・平安時代の様相

古墳時代後期の住居跡と同様に北側調査区では台地の縁辺に沿って、南側調査区では西に向かって傾斜する緩斜面部に展開している。北側調査区の北端より検出された2号住居跡からは、帯金具(巡方)が出土している。律令制下では、帯金具をはじめとして、服装や装身具等で位の上下が表されており、その材質・形状・色・大きさによって位階を示したものである。また、その南側に隣接する3号住居跡は、遺物の遺存も良好であり、須恵器長頸瓶や、「福」、「子中」、「佐善カ」等の墨書土器が出土している。

中世の様相

南側調査区で検出された中世の台地整形区画は、東側の谷津に面した斜面部を深さ約1.5m削平している。区画内からは建物跡、地下式坑等が検出され、隣接する平成20年度調査区で検出された台地整形区画と同様に、屋敷に伴う区画であると考えられる。

北側調査区では、検出された道路跡及びそれと並行するように断面がV字状を呈する溝状遺構が南北方向に縦走している。これより西側からは、中世期の遺構が検出されていない。

遺物は出土量が少なく、台地整形区画内から検出された地下式坑から、五輪塔の一部(火輪)、内耳鍋、カワラケ等が出土している。

まとめ

古墳時代後期および奈良・平安時代の集落は、昭和50年の調査区においても検出されており、本台地

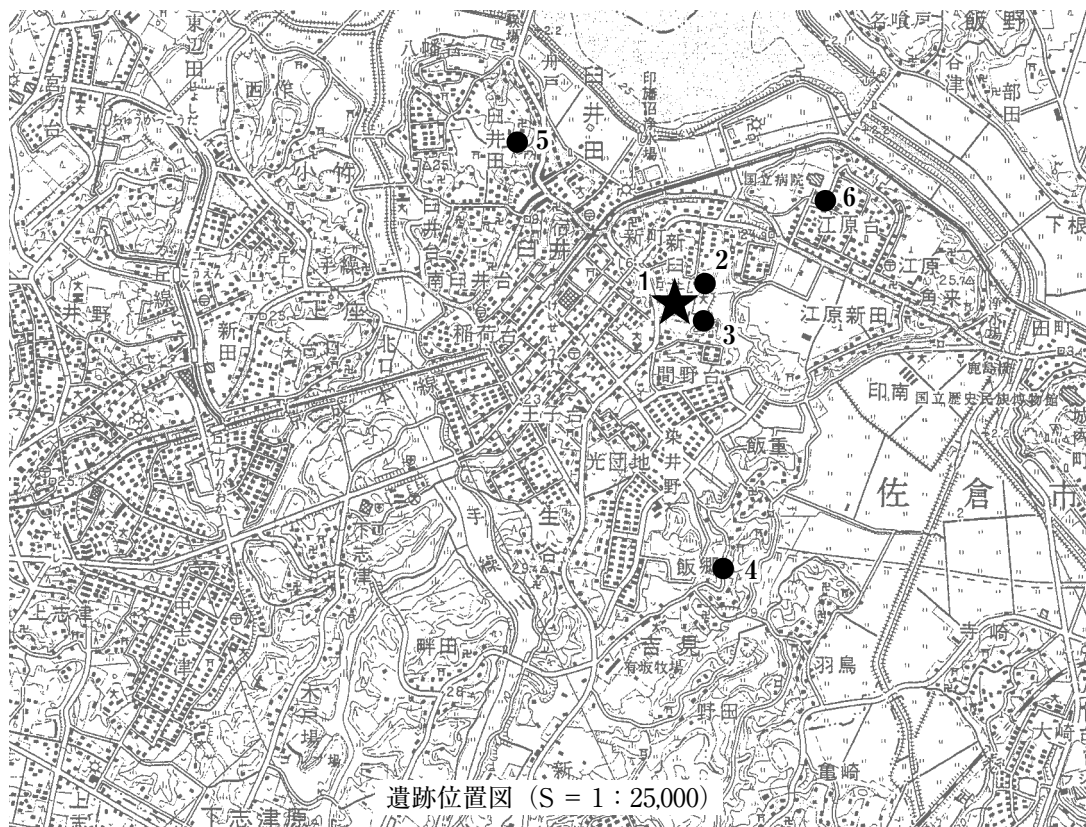
上に大規模な集落が展開していたことがうかがえる。子持勾玉や土鈴といった印旛沼周辺では出土例の少ないものや、奈良・平安時代の帯金具といった特殊な遺物が出土したこと、さらに北に隣接する概期の大集落が形成されていた江原台遺跡を含めて、当地域が、古墳時代後期～奈良・平安時代における印旛沼南岸の拠点的作用を担っていた可能性がうかがえる。

中世の台地整形区画及び溝状遺構、道路跡は、出土した遺物から15世紀後半に該当すると考えられ、平成20年度の調査によって検出された台地整形区画と同時期であることが判明した。

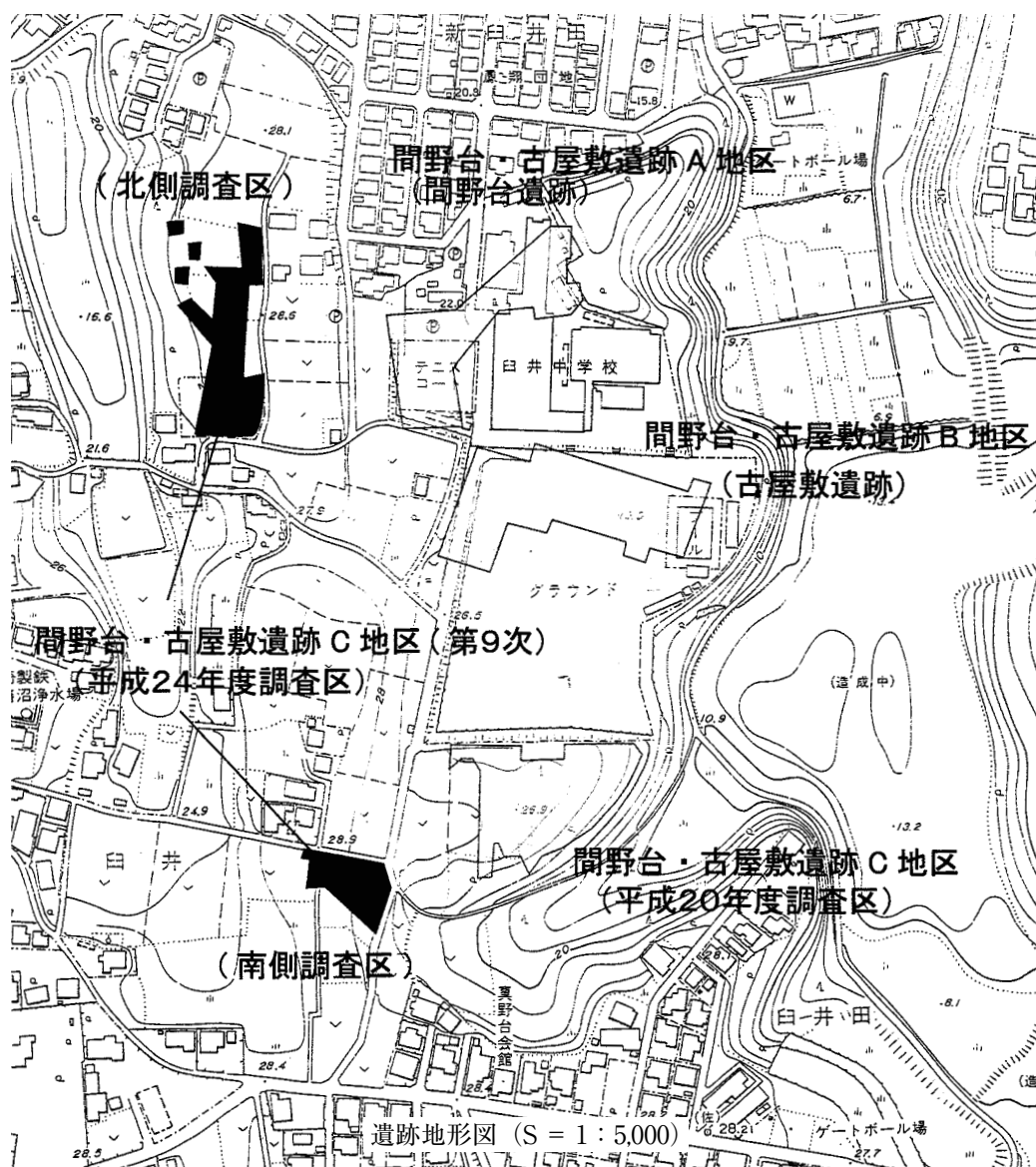
土坑墓群が検出し墓域と考えられるA地点・B地点、その南側に台地整形区画や建物跡が検出し、屋敷地と考えられるC地区及び今回調査の南側調査区、さらに北側調査区の溝状遺構や道路跡など、中世遺構は、本遺跡の所在する台地全体に広がりを見せ、本遺跡が中世においても人々で賑わっていた様子をうかがい知ることができた。

15世紀後半という時期は、享徳の乱や応仁の乱などによって、全国的な戦乱の時代を迎えていた。白井城においても、1479年に太田道灌の弟、太田資忠らによって攻め落とされており、中世においても印旛沼南岸は大きな変革の中にあった。

白井周辺を含めた印旛沼南岸地域は、古代から関東における重要な拠点の一つであり、連綿と人々の活発な動きが見られたことがうかがえる地域といえるだろう。



1. 間野台・古屋敷遺跡
C 地区 (第 9 次)
2. 間野台・古屋敷遺跡
A・B 地区
3. 間野台・古屋敷遺跡
C 地区
4. 臼井屋敷跡遺跡
5. 臼井城跡
6. 江原台遺跡

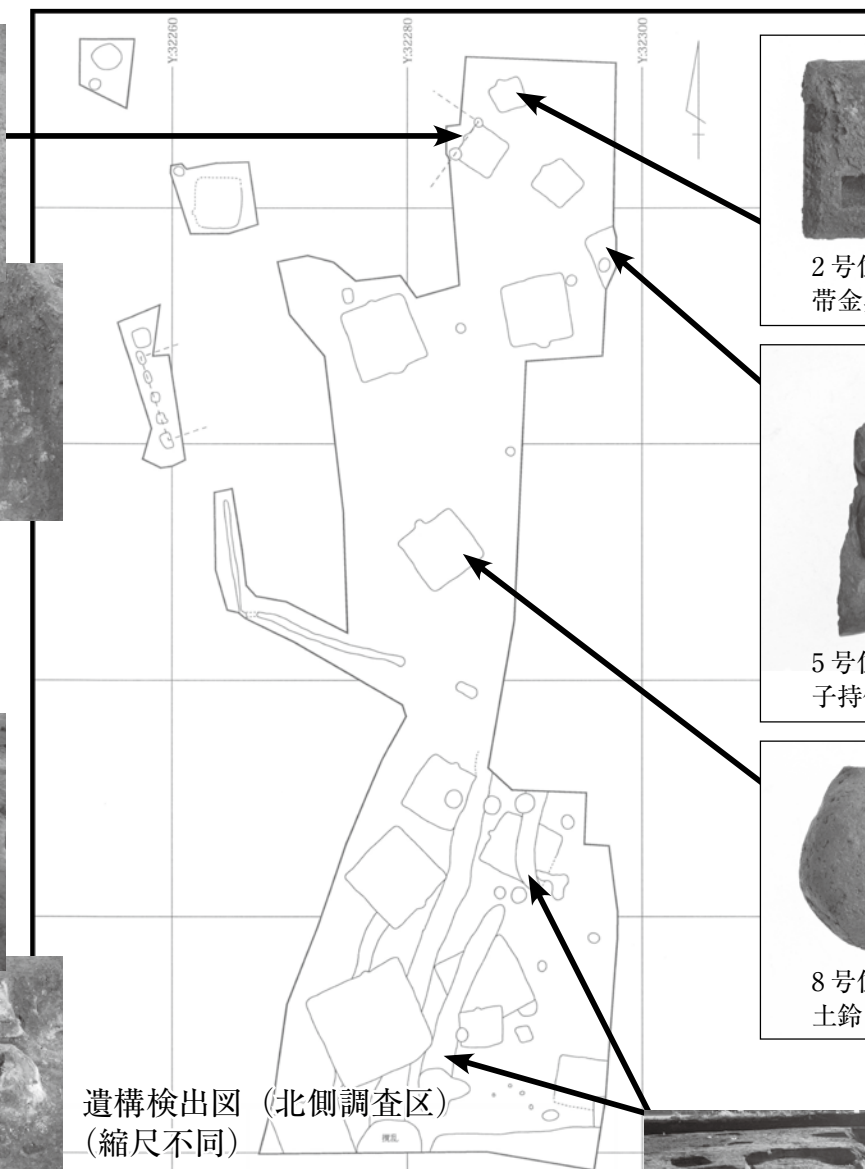
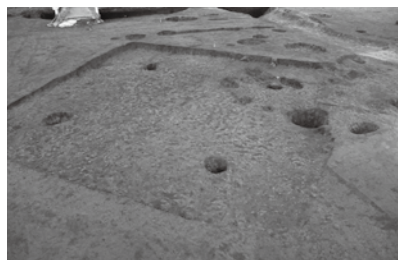




平安時代竪穴住居跡と
遺物出土状況



古墳時代竪穴住居跡と
カマド遺物出土状況



遺構検出図（北側調査区）
（縮尺不同）



2号住居跡出土
帯金具



5号住居跡出土
子持勾玉



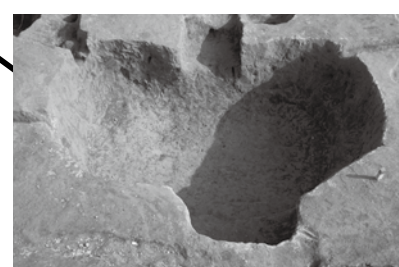
8号住居跡出土
土鈴



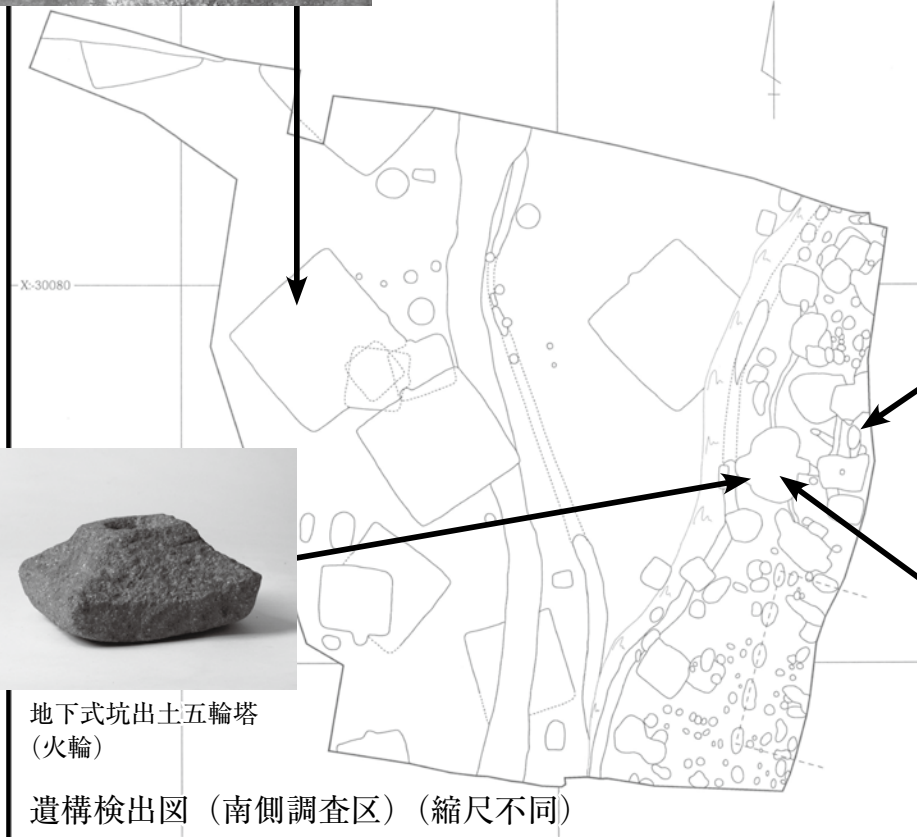
中世溝状遺構（北側調査区）



中世台地整形区画（南側調査区）



中世地下式坑（南側調査区）



地下式坑出土五輪塔
（火輪）

遺構検出図（南側調査区）（縮尺不同）